

「辺境」をフィールドワークする—宮本常一と九学会連合の初期調査をめぐって

坂野徹（日本大学）

前口上

これまでのお仕事

- ・ 修士時代：ドイツの優生学史（19世紀末～20世紀前半）
- ・ 博士時代：日本の自然人類学史、植民地科学史（パオオ熱帯生物研究所など）
- ・ その後：文化人類学（民族学）・民俗学・考古学などを含む人類諸科学の歴史、植民地および「戦後」日本におけるフィールド調査史、「人種」をめぐる研究史など

現在の主要関心

- ・ 人文・社会科学を含むフィールドワーク系の学問史
- ・ 科学（学問）と政治・社会・「差別」の問題
- ・ 「日本」という「想像の共同体」（B・アンダーソン）と人類諸科学

今後の研究計画

- ・ 日本の考古学史（「縄文人」「弥生人」表象の歴史、「戦後」考古学の成立など）
- ・ 「戦後」日本の海外における調査史（京大霊長類学のアフリカ研究、南極観測隊、民族学協会の東南アジア調査と冷戦構造の関係など）
- ・ 「戦後」日本国内における調査史（九学会連合を含む国内における人文・社会科学の調査史など）

1 九学会連合とは何か

九学会連合の誕生

- ・ 1947年、6つの学会による連合大会開催：民族学協会、人類学会、社会学会、考古学会、言語学会、民間伝承の会（49年より日本民俗学会）→48年、地理学会、宗教学会の参加（八学会連合）→51年、心理学会の参加：九学会連合へ（その後、64年に東洋音楽学会が参加、69年に考古学会が脱退）
- ・ 個人発表→毎年テーマを決めての共同発表という形式へ（「稲」「火」「東京・家」など。68年以降は共同調査の報告のみ）
- ・ 会長：渋澤敬三（1896—1963）…著名な財界人であると同時に民俗学者、アチック・ミュージアム主宰。戦前から人類諸科学の影の支援者、コーディネーター

日本敗戦とフィールド科学

- ・ 1945年以前、日本の研究者は帝国各地（植民地、占領地）で調査研究→敗戦に伴う調査フィールドの喪失（海外渡航の制限も）：日本列島内（特に「辺境」）の調査へ
- ・ 敗戦後の研究環境悪化に伴い、学会活動やフィールド調査は困難に→学会連合による連合大会、共同調査へ

九学会連合のフィールドワークの展開

- ・ 解散（1990年）までに計11回の共同調査：
 - (1) 対馬（1950—51）、(2) 能登（1952—53）、(3) 奄美（第一回、55—57）、(4) 佐渡（59—61）、(5) 下北（63—64）、(6) 利根川（66—68）、(7) 沖縄（71—73）、(8) 奄美（第二回、75—77）…地域を指定しての共同調査
 - (9) 日本の風土（80—82）、(10) 日本の沿岸文化（83—85）、(11) 地域文化の均質化（86—88）…特定のテーマを定めて学会ごとに自由に調査

2 宮本常一と九学会連合

宮本常一（1907—1981）

- ・ 山口県周防大島生まれ、大阪府立天王寺師範学校専攻科卒。柳田国男、渋澤敬三に見出されて民俗学の道へ。1939年、渋澤の主宰するアチック・ミュージアム（後に日本常民文化研究所）研究員に。戦前から日本各地でフィールドワークを続け、膨大な記録を残したことで知られる。佐野眞一『旅する巨人—宮本常一と渋澤敬三』（文藝春秋、1996年）刊行以降、再評価が進み、現在も宮本ブームは継続中。

宮本常一と九学会連合

- ・ 対馬調査：宮本にとって戦後最初の本格的フィールド調査（戦時中、調査のかたわら、国策団体に農業指導に関与）→対馬調査参加によって「もう一度調査に専念してみたい」と決意
- ・ 対馬調査中の見聞→代表作『忘れられた日本人』（1960年）中の「対馬にて」「梶田富五郎翁」へ
- ・ 対馬・奄岐における離島の人々との出会い→離島振興法（1953年）、離島振興事業への関与へ
- ・ 九学会連合同年調査への参加：対馬、能登、佐渡、下北（初年度に渋澤死去）…病氣療養中のため奄美調査には不参加

3 九（八）学会連合と朝鮮戦争

対馬調査の計画

- ・ 50年度大会のテーマを決める理事会で実地調査の提案：淡路島、「琉球」、対馬の三案→対馬に決定（1950・51年夏）
- ・ 小堀巖（地理学者）「大陸文化と日本文化の交流点であろう（？）（ママ）ということ、及び終戦迄要塞地帯であつたため殆どその学術調査の行われていない処女地であること、それから又その面積も適当であること」から（小堀、1951）
- ・ 全体世話役：泉靖一（民族学者、明治大学教授）
- ・ 51年の調査より心理学会も参加→九学会連合に
- ・ 日本敗戦後、本格的に紹介が始まったアメリカの地域研究（エリア・スタディーズ）から影響を受けた戦後最初の総合調査（柴田、1994）
- ・ 参加研究者（表1参照）
- ・ 調査準備：外務省事務官から「外交上の対馬問題」レクチャー（1月17日）、東亜考古学会による報告、総合調査の方法をめぐる研究会（ジョン・ベネット）、在京対馬人会との懇談会、現地予備調査（2月末～3月、泉靖一・金田一春彦）
- ・ 7月5日、対馬巖原着、8月10日本部引き上げという計画

朝鮮戦争の勃発

- ・ 6月25日朝鮮戦争勃発
- ・ 宮本常一の回想：「翌二五日東大へいった。東京から参加する者はほとんど集っており、対馬渡島についての打合せがあり、昼までに終り、つづいて民族学班だけの集りがあった。民族学班には石田英一郎、泉靖一、鈴木二郎、石原憲治氏らがあり、泉氏が調査団の幹事長をつとめることになっていた。一通りの打合せの終わったのは二時で、石田さんはそれから柳田国男先生のところへ行くというので私も一緒にゆくことにした。〔中略〕さて、東大を出てお茶の水まで歩

いてゆく途中、アイスクャンディ屋が「朝鮮に対して宣戦布告か」とひとりごとを言いながら通りすぎた。石田さんに「何のことでしょう」と聞くと「北朝鮮が南朝鮮に対して戦争をしかけたのではないですか」といった。大分切迫した様子であるからとの石田さんの話には、田舎にいとそういうことには疎くなるものだと思った。」(宮本、2009)

- ・ 調査決行を決定
- ・ 対馬に大勢の新聞記者が詰めかけ、記者たちに囲まれての調査に

4 宮本常一がみた朝鮮戦争

対馬調査隊と朝鮮戦争

- ・ 朝鮮戦争の経緯と対馬調査隊(表2)
- ・ 対馬における在日朝鮮人の調査は「政治的顧慮」から取りやめに

宮本と朝鮮戦争

- ・ 宮本の回想にみる朝鮮戦争の影
- ・ 朝鮮戦争の砲撃を聞く(?) : 「頂上に立っていると遠くの方に雷の鳴るような音をする。しかし雷ではないようだ。空がはれていて一点の雲もない。「あの音は何でしょう」と泉さんに聞いてみたが泉さんも首をかしげて何だろうと考えこむ。ふと朝鮮戦争での大砲の音ではないだろうかということに気付いた。対馬から朝鮮へは近いのである。そこでその朝鮮を見たいと思ってほんの少々尾根づたいに北へゆくと、西北に広い海が広がり、その海の水平線の向こうに低くつらなっている朝鮮の山々がのぞまれた。」(7月25日、佐須奈村恵古にて)(宮本、2009)
- ・ 当初予想されたような大量の難民が対馬に押し寄せるといった事態は生じず、無事調査は完了
- ・ 1951年の調査時：朝鮮戦争は38度線付近の攻防へ…ほとんど戦争を意識せず調査を実施

5 対馬は日本である

対馬領有問題

- ・ 日本敗戦後の対馬：マスコミの高い関心…「国境線」の島
- ・ 1948年8月、韓国初代大統領・李承晩による対馬の韓国返還(譲渡)要求(→52年、「李承晩ライン」→日韓基本条約)
- ・ 対馬調査と対馬の帰属問題…浅野(山階)芳正の回想：「それから、これはかなりのちになってわたくしが直接渋沢先生からうかがいましたから、まちがいないと思うんですが、当時韓国の李承晩大統領がですね、対馬は朝鮮の領土だと言い出したことがありまして、李承晩というのはああいう李承晩ラインなどというのを勝手にひいたりするような人ですからね、それに対して日本側もし将来この問題がこじれた場合に、対馬は朝鮮と違うのだ、昔から日本の領土で文化的にみてもあるいは人類学的にみてもですね、日本なのだということを証明しておく必要がある。そんな関係で対馬に決まったようです。」(浅野、1985)
- ・ 調査直前における周囲の声：「八学会はG・H・Qから手を廻して予算を通し、軍事基地化の基礎研究を行うのである。けしからん話だ」と語る「学術会議委員や某研究所員」も(小堀、1951)

対馬住民の期待と協力

- ・ 有賀喜左衛門(農村社会学者、東京教育大教授)：「対馬の文化が日本文化圏に属しているかどうかという問題は、九学会が一九五〇年と一九五一年とに企てた対馬共同調査の目標とする最も大きな課題であった。この事は対馬の人達にとってはもっと切実な問題である事を私達は対馬に渡って見て初めて痛感したのであるが、この調査研究により、それに対する明確な結論が出た事を信ずるものである。」(有賀、1954)
- ・ 宗武志(在京対馬人会会長)：「ぜひこの研究が成功することを私は希望するが、天の時もあり、地の利もある。[中略]ただし、人の輪に至っては、大いに心すべき事だと思う。私は学者たちが、たぶん島の人たちに、よい印象を与えるだ

ろうとは思いますが、島のわれわれの方でも、研究する人たちに、出来るだけ便宜を与えて上げる様にしたいと思う。もし小さい村に大勢の人達が宿る様な事にもなると相方ともに不便な事が起るかもしれない。けれども対馬の研究ということのために、不便を忍んでいただきたいものであると思う。」(対馬新聞、1950)

- ・ 小堀：東京では八学会といってもあまり通用しないが、対馬では、支庁その他からの連絡、在京の宗氏からの私信、新聞記事などによって、調査を知らない地域はなく、色々な点で便宜を受け、「八学会といえば、地元の方々が我々を先づ信用して下さったのは、全くかけがえのない割引券であった。」(小堀、1951)

対馬調査隊の調査と結論

- ・ 調査の基本姿勢：対馬＝大陸（朝鮮）からの影響よりは日本の「古い文化の形」を残す土地という視点
- ・ 当初の予想以上に対馬には大陸（朝鮮）からの影響はほとんど存在しないという総括：言語学、人類学など（泉井他、1951）（池田他、1951）
- ・ 対馬住民の「安堵」…宗武志：「対馬人が日本人であるとか無いとか、考えさへもしない。けれども驚くべし、世の中には対馬人が一種特別な異人種であるかの様に思っている人もいるそうである。昨年度の調査団の研究結果は、学問的に、かゝる疑問を一掃するものである。対馬は、日本の他の土地では研究する事の出来ない、幾つかの重要な問題を提示するらしい。われわれ対馬人の協力が、日本学界に寄与する事は愉快でなければならない。」(対馬新聞、1951)

6 「寄りあい」と九学会連合

「寄りあい」の記述とその調査日程

- ・ 1959年、宮本常一「対馬にて」を雑誌『民話』に発表
- ・ 「対馬にて」：「寄りあい」と「民謡」の二部構成
- ・ 「寄りあい」：1950年の調査時、宮本が出会った二つの「寄りあい」の情景：対馬西北部の伊奈（現・対馬市上県町伊奈、7月23・24日）と東岸の千尋藻（現・対馬市豊玉町千尋藻、8月7・8・9日）
- ・ 伊奈にて：「九学会連合(ママ)の対馬の調査に来た先生が、伊奈の事をしらべるためにやって来て、伊奈の古い事を知るには古い証書類が是非とも必要だというのだが、貸していいものだろうかどうだろうか」と区長から切り出す→「いままで貸し出したことは一度もないし、村の大事な証書類だからみんなでよく話しあおう」→……→古文書借り出しに成功
- ・ 「寄りあい」経験→宮本の考察：少なくとも西日本の村々では古くからこうした協議＝「寄りあい」が行われ、そういう会合では郷土や百姓といった区別もない一種の自治制度が成立(宮本、1960)→安保闘争さなかという政治状況下、高い関心を集める

「寄りあい」と「古い日本」

(1) 古文書借り出しと九学会連合に対する対馬住民の協力

(2) 「寄りあい」＝土着の民主主義＝「古い日本」という宮本の了解と九学会連合の共通了解

- ・ 宮本の回想：「その時、対馬を歩いてみまして、私が大変教えられたことがある。それは、対馬は朝鮮に近いのだから、住民の中には朝鮮人の血がうんと入っておって、日本・朝鮮両方の混血状態がそこではみられるのではないか。朝鮮文化が非常にはいりこんできていて、独特な習俗がつくられているのではないか、とっておったのです。ところが予想に反して、全然その逆だった。むしろ、私たちが想像していた以上に、そうだったのです。」(宮本、1971)
- ・ 人類学班の結論への言及

7 小括—対馬調査の意味

九学会連合の対馬調査：

- ・ 日本の敗戦に伴う国境線の引き直し→「国境線」対馬の調査＝「日本人」「日本文化」の境界を確定すること

- ・ 現地住民の期待と調査団の「同調」
- ・ 宮本常一：「寄りあい」＝「古い日本」の姿の発見

結びにかえて その後の九学会連合と共同調査の展開

九学会連合の活動と時代区分（柴田、1990）：

- ・ 「前期」（「上り坂の時代」）：1947—63年（渋澤会長時代）…「初期」（47—50）と「全盛期」（51—63）
- ・ 「後期」（「下り坂の時代」）：1964—90年（会長は輪番制）…「衰退期」（「沈滞期」）（64—77）と「晩期」（78—90）

各共同調査の調査地選考過程

- (1) 対馬（1950—51）：省略
- (2) 能登（1952—53）：「琉球」、伊豆諸島などの案から渋澤の意向により理事会で決定（「島」から「半島」へ）。調査の詳細は拙著参照。
- (3) 奄美（55—57）：「西南諸島」（沖縄）、佐渡、北海道、天草、五島、奄美大島、「河川」「半島」「湾」「都会」「山」から理事会決定。奄美大島復帰は1953年。調査の詳細は拙著参照。
- (4) 佐渡（59—61）：「今までの地域調査の場合と同様に、比較的纏まりのよい島嶼である上に、日本文化の移動とその地域との関連による変容を究明する上に必要な地域であったから」（渡辺、1961）。1958年、新潟大学において人類学民族学連合大会開催時、佐渡へのエクスカージョンが実施された際、宮本が同行の関敬吾（民俗学者）と「これはどうしても観光客にあまり荒らされる前に九学会連合で調査しておく必要がある」と相談。
- (5) 下北（63—64）：沖縄案も出たが、正式には下北半島、利根川、信濃川、八丈島、隠岐から理事会で満場一致で下北に決定。
- (6) 利根川（66—68）：利根川、吉野川、津軽、渥美半島、知多半島、沖縄の八重山、「都会」などから利根川に決定。
- (7) 沖縄（71—73）：アンケートにより総会で沖縄に決定。1969年に沖縄返還が表明され、各種調査が盛んになっていた背景があった（返還72年）。
- (8) 奄美（第二回、75—77）：「海外を含め、いくつかの場所があげられたが、既調査地たとえば対馬・奄美などを二十五年すぎた時期に再調査する必要性と意義」が理事会で論じられ、最終的に奄美に決定。さらに、前回の沖縄調査を受けて、「沖縄と接して、しかも沖縄から本土へ連なる線上にあり、沖縄と多くの点で共通の要素をもっていると考えられる奄美を、沖縄を見た眼で再調査したいという要望」が強く出されたということもあった。
- (9) 「日本の風土」（80—82）：九学会連合解体の危機が訪れたため、理事会を重ね、最終的に「日本の風土」という共通テーマで、調査団の人数を大幅に減らすことに決定（小島、1990）。「特定地域の共同調査については一定の成果を得た、あるいは、これ以上この形では共同調査・共同研究の進展は望めそうもない」から（柴田、1990）。
- (10) 「日本の沿岸文化」（83—85）：「日本の沿岸文化」「対馬海峡文化」「ハレとケ」「女性」「祭」「水」「黒潮文化」などの提案から「日本の沿岸文化」に決定。
- (11) 「地域文化の均質化」（86—88）：各学会から出された「日本人と災害」「朝鮮と日本」「アジア諸国と日本」「地方文化の消滅と生成」（心理学会）、「文化の標準化」（言語学会）、「地域性再考」（民族学会）、「外来文化と日本文化の研究」「都市化と視点から日本文化の標準化を考える」（宗教学会）、「オホーツク海文化の研究」「都市化の問題」（地理学会）、「教育に関する問題」（民俗学会）から「地方文化の消滅と生成」を有力候補として選び、最終的に「地域文化の均質化」に決定。

九学会連合の解散

- ・ 1988年5月8日の理事会で民族学会より脱会の申し出（「九学会連合結成当初は、共同研究を通じた学際的研究の場の提供、小規模学会の連合による強力な研究機関の組織化などを主たる目的としていた。しかしその後、九学会連合加盟学会もそれぞれの組織が拡大し、各学会内での学際研究が活発に展開してきたので、九学会連合の設立目的は現在の時点からみると十分に果たされてきたと考えられる」という基本見解）。保留。

- ・ 同 7 月 9 日理事会：人類・民俗の 2 学会が民族学会退会の場合には同様に退会すると表明。地理・言語・心理・音楽は、運営方法の改革によって存続をはかりたい旨表明。
- ・ 同 9 月 18 日理事会：社会学会も退会の方向で検討していると表明。1990 年 3 月をもって解散するという案が提出。各学会にもちかえることを決定。
- ・ 同 12 月 23 日理事会：90 年 3 月末の解散を正式決定。

九学会連合同調査の意味

- ・ 対馬から奄美（第 2 回）まで：利根川を除き、日本の「辺境」地域を対象…「辺境」（＝「日本」の「外部」との境界地域）のフィールド調査を通じて、「帝国」解体後の「日本」「日本人」「日本文化」を（再）定義する営み
- ・ 高度経済成長に伴い急速に変容していく日本列島各地の「辺境」を探し出す→それが不可能となった時点で、地域を限定した共同調査は放棄→日本列島の変容の果てに、「地域文化の均質化」をテーマとして終焉を迎える

宮本常一と九学会連合

- ・ 能登、佐渡、下北に参加
- ・ 能登：時国家文書の調査・借り出し（網野、1999）
- ・ 佐渡：現地住民との交流→地域振興への関与
- ・ 九学会連合での経験と「調査地被害」（宮本、1972）

表 1：八学会対馬共同調査の編成（1950 年 8 月段階）

1 本部（研究調査の総合調査及び事務連絡）	委員長 副委員長（現地調査隊長） 同（長崎大学班長） 同（人文諸科学総合班長） 幹事長 幹事 幹事 助手	辻村太郎（東大教授、地） 今村豊（広島県立医大教授、人） 北村精一（長崎医大教授、人） 古野清人（九大教授、族） 泉靖一（明大教授、族） 鈴木二郎（早大講師、族） 小堀巖（東大助手、地） 蒲生正男（広島医大助手、人）
2 学会	研究題目及び研究員（所属）	
日本語学会	対馬方言の音韻の研究 対馬方言の語彙の研究 対馬方言の語法の研究	金田一春彦（国立国語研究所員）、山本謙吾（東大講師） 三根谷徹（同助手） 泉井久之助（京大教授）、堀井令以智（同特別研究生） 奥村三男（同特別研究生） 吉町義雄（九大教授）
日本考古学会	志多留貝塚の発掘研究 内院及び中山の古墳の発掘研究	駒井和愛（東大助教授） 杉原荘介（明大助教授）、三木文雄（国立博物館技術員） 曾野壽彦（東大助手）、増田精一（国立博物館技術員） 中川成夫（東大助手）
日本人類学会	対馬の先史学的研究 対馬住民の形質人類学的研究 対馬住民の形質人類学的研究	渡邊仁（東大文部教官） 今村豊（広島医大教授）、鈴木誠（同助教授） 小林廣志（同助教授）、坂田正、蒲生正男（広島医大助手） 小濱基次（奈良医大教授）、古江忠雄（同助手） 安中正哉（長崎医大教授）、若原昭（同助手）

	<p>生体測定及び手掌紋の調査</p> <p>対馬住民の食物及び住居に関する衛生学的研究</p> <p>対馬におけるフィラリア症及び蚊族の研究</p> <p>対馬住民の育児の方法、離乳食、食餌の習慣性、発育状況、及び疾病別死亡率の調査</p>	<p>池田琢郎 (同助手)</p> <p>藤本董喜 (長崎医大教授)、中村正 (同助手)、 福井謙三 (同助手)</p> <p>片峰大助 (長崎医大助教授)、大島正治 (同講師) 山崎豊彦 (同助手)</p> <p>和泉成之 (長崎医大教授)、栗原啓太郎 (同研究生) 福田和夫 (同助手)</p>
日本地理学会	<p>対馬近海の海洋学的研究</p> <p>対馬における人口と集落の研究</p> <p>対馬の気象学的研究</p> <p>対馬における植物地理の研究</p>	<p>田山利三郎 (運輸省水路部測量課長)</p> <p>木内信蔵 (東大助教授)</p> <p>関口武 (運輸省気象研究所技官)</p> <p>前川文夫 (東大助教授)、佐藤久 (同講師)</p> <p>河野通博 (岡山大助教授)、小堀巖 (東大助手)</p> <p>山階芳正 (同特別研究生)、大原久和 (同学生)</p> <p>矢橋謙一郎 (同)</p>
日本民俗学会	<p>対馬における神事の研究</p> <p>対馬における女性の地位に関する研究</p> <p>対馬における生産と労働慣行に関する研究</p>	<p>和歌森太郎 (東京文理大教授)</p> <p>瀬川清子 (民俗学研究所員)</p> <p>直江廣治 (東京文理大講師)、櫻井徳太郎 (同助手) 竹田旦 (同)</p>
日本民族学協会	<p>対馬の漁法漁労の研究</p> <p>対馬における霊地の研究</p> <p>対馬における隠居の研究</p> <p>対馬の民具に関する研究</p> <p>対馬におけるエスニック・グループ</p> <p>対馬における在来農法</p> <p>対馬における民家の研究</p> <p>瀬戸内海沿岸と対馬の文化の比較研究</p>	<p>淡澤敬三 (日本民族学協会評議員)</p> <p>宮本常一 (日本常民文化研究所員)</p> <p>石田英一郎 (法政大教授)</p> <p>大間知篤三 (日本民族学協会評議員)</p> <p>宮本馨太郎 (立教大教授)</p> <p>泉靖一 (明大教授)、鈴木二郎 (早大講師)</p> <p>渡邊兵力 (日本農業研究所員)</p> <p>石原憲治 (東京都立大教授)</p> <p>Richard K. Beardsley (ミシガン大助教授)</p> <p>Edward Norbeck (同日本研究所)</p>
日本社会学会	<p>対馬における家族と同族の研究</p> <p>対馬における村落構成及び土地制度の研究</p>	<p>喜多野精一 (九大教授)、執行嵐 (同特別研究生) 中村正夫 (同)</p> <p>岡田謙 (東京文理大教授)、中野卓 (東京教育大講師)</p>
日本宗教学会	<p>対馬島民の呪術慣行に関する研究</p> <p>対馬神道の研究</p>	<p>小口偉一 (東大助教授)、高木宏夫 (同助手)</p> <p>戸田義雄 (國學院大助教授)、田中健夫 (史料編纂所員)</p> <p>西角井正慶 (國學院大教授)、岩本徳一 (同助教授)</p> <p>宮地治邦 (同講師)、岡田米夫、鈴木棠三</p>

表2 八学会連合対馬調査 (1950年) と朝鮮戦争

月日	朝鮮戦争の経緯	調査隊日誌
7月5日	米軍先遣隊、烏山の戦いで敗北	泉靖一ら第一陣の7名が瀬原 (現地本部) 着。「思いがけぬ動乱の勃発によりおくれた主力を一日も早くよぶよう、東京と連絡する万端の手筈を整える」。
7月7日	米軍25万人を中心に国連軍結成	
7月9日		第二陣として宮本常一來島。
7月11日		民俗学班、考古学班、長崎医大来島 (その後、各班の研究者は順次来島)

7月15日		盆の行事見学。対馬在留米軍兵が精霊船に向かって大声で叫んでいるのを見る。「この美しい精霊流しの夜は、やがて朝鮮の戦線に向う異国の兵士にとって、忘れ得ぬ思い出となるであろう。海の彼方では、本当の新仏が毎日々々沢山つくられている現実を考えて、何かわりきれぬ思いにこぼれた」。
7月16日	韓国政府がソウルから大邱に移転	
7月17日	福岡市に灯火管制	遅れて届く新聞速報からも「北鮮軍が次第に南下してくる情勢がよくわかる。それにも拘らず地元の人々は、意に介さない程おちついていて。元寇以来、外寇にはなはれているからと笑って答える町民の声はともかく、百聞は一見にしかず、地図の上の公式論で、国防第一線と考え、水盃をかわして出発した隊員もあるという出発前の悲壮感は、急にぐらついてくる。しかしそれは表面だけで、島の行政の主にあたる人々の心労は目にみえないのではないだろうか」。
7月18日	大田攻防戦で国連軍大敗	「本部員は、支庁と連絡をとる一方、絶えず電話使用その他で隊員の動静をしり地図上にその位置を記入し、完全にその行動を把握していることを最高目標として努力をつづける。…戦局が万一悪化して内地引揚げなどの場合に備えねばならなかったからである。新聞社の速報ではたらないので、昼間ラジオのきける支庁と時々連絡をとったりした。ただし、予想されたような朝鮮からの「難民の大挙来島も殆んどなく、大勢来島していた新聞記者も拍子抜けの様子」。
7月26日	(この頃、国連軍は釜山付近まで追い詰められる。)	「今村、泉、鈴木などの本部の幹部は、終戦時何れも満洲域いは華北にあつて引揚げに苦難をなめた経験者であるだけに、全くの杞憂ではあつたが、調査隊員の全島引揚げ問題など万一おこつてもビクともしない自信をもつていたのは、心強い限りであつた」。
8月6日		「これより2・3日の間は、次第に人がへる一方で、どうやら調査も峠をこした感じである。釜山付近も第二のダンケルクにはならずすみそうで、形式的な安堵感が少しは得られる」。
8月19日		宮本離島。
8月20日		本部正式解散。
9月15日	仁川上陸作戦	